

大島紬と泥染



昨年は、見学会でシルク博物館を訪ね、このコーナーでは藍や紅花をとりあげました。その縁で興味を持ったのが、染色の技術でした。

布を色で染めることは、古くから行われていました。古代日本では、麻糸の繊維が用いられていました。その染色は、草木の汁液や花などで摺染（スリゾメ）していたと思われます。染の技術は、大陸から織の技術とともに入ってきたことにより大きく進展しました。そのころは、すでに蚕から絹糸を採取することも行われるようになっていました。

飛鳥時代から天平の時代になると、植物染の技術は大きく発展しました。この時代になると、明礬（ミョウバン）や硫酸鉄などを使用する、いわゆる媒染の技術が使われるようになりました。この時代の染の技術の一端は、正倉院御物で見ることができますが、現在では真似のすることのできないほどの高度なものといえます。

染めると一言でいいますが、着物（呉服）の世界では、注意しないと混乱が起こることがあります。染めるということは化学用語では「染色」ですが、着物の世界では「染織」という言葉をよく使います。着物は帯を含めて織物と染物に分類されます。染物というのは「後染の着物」、織物というのは「先染の着物」のことです。先染とは糸の段階で色を染た布のこと、糸を染めずに織って後から色づけしたものが後染です。

友禅など、絵柄を白の生地を描いたものが「染物」、緋や紬などのように糸を染めて追ったものが「織物」と区別されています。

古代から江戸時代の末期まで、染の素材としては、天然素材である植物が使われていました。しかし、幕末に合成染料が輸入されると、それまでの天然染料は急速にすたれてしまいました。

しかし、伝統的織物では、現在でも天然染料を使って染織を行っている例があります。代表的なものとして、大島紬があります。

紬は蚕〔かいこ〕の繭〔まゆ〕から糸を取り出し、より（ひねり）をかけて丈夫な糸に仕上げて織った絹織物のことです。紬は織物の中で最も渋く、深い味わいを持つ着物で、着物通の人が好む織物とされています。大島紬は、紬のなかでも最高級品とされる奄美大島特産の織物です。

大島紬の染色は、泥染という独特の方法が用いられています。泥染といっても、泥を染料として用いるのではなく、染料を発色させたり繊維に定着させたりする媒染剤として用いられます。染料として用いられるのは、シャリンバイ（車輪梅）という植物です。シャリンバイの樹皮は根を煎じた汁に繰り返し漬けていくうちに、シャリンバイに含まれる色素成分タンニンにより、赤褐色に染まります。それを鉄分を含む奄美大島の泥に漬けるとタンニンと鉄との反応によって黒褐色の色調を帯びてくるとともに、染料が繊維と強く結びついて、水に溶けにくくなります。シャリンバイに数十回漬けては泥に1回漬け

るという作業を数回繰り返すことによって独特の渋い黒の色調に染まります。

こうして作った糸を織ることで、伝統的な大島紬が出来上がります。完成までほぼ1年かかるといいます。



染のための紬糸



泥染の様子



泥染め体験



シャリンバイの花

この泥染めの体験は、奄美大島では体験することができます。まだまだ、植物由来の染の技術は生きていますし、最近では、合成染料を使わないナチュラル素材の衣服の染色にも使われ、あらためて注目されるようになってきました。

大島紬に関するホームページ <https://sites.google.com/site/honbaamamioshimatsumugi/>
<http://www.tsumugi.co.jp/index.html>
<https://rito-guide.com/dorozome/>

染織の世界は奥が深く、まだまだ知りたいことが沢山あります。今後とも、機会があれば追いかけてみたいと思っています。(八代)